私の本棚

『暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』

堀川惠子著（講談社）

内藤　真治

武士は食わねど高楊枝？

その昔、「輜重(しちょう)輸卒が兵隊ならば、蝶々トンボも鳥のうち、電信柱に花が咲く」という戯れ唄があった。『故事・俗信　ことわざ大辞典』に「蝶やトンボに羽があるからといって鳥とはいえないように、輜重輸卒は兵隊の格好はしていても、はなばなしく前線で戦う兵士ではないから兵隊とはいえない。軍隊の中での重要でない役割にすぎないということを嘲っていったもの」。

「輜重」は「兵站（へいたん）」と同じで、軍隊にあって前線に食糧や武器弾薬、その他の資材を運搬、補給する部署をいう。軍隊で食糧や武器弾薬を前線に送り届ける仕事がどうして「重要でない役割」などと言えるのか。昔から「ハラが減っては戦はできぬ」と言うではないか。

かつての日本軍でも一応は兵站の重要性を認識していたようだ。しかし陸軍士官学校で輜重科は歩兵・騎兵・砲兵・工兵の各科に比べ明らかに低く見られていたし、輜重将校はどんなに出世しても中将どまりで大将にはなれなかった。厳密に言えば「輜重輸卒」と「輜重兵」は異なるが略す。

前線で派手にドンパチやる花形に比べ、「裏方」「縁の下の力持ち」は評価されないのが日本軍の伝統だった。兵站を軽視した結果、「名誉の戦死」と称えられた死者の多くが実は「餓死」あるいは「栄養失調による戦病死」であった、という事実に帰着する。

「糧を現地に求め」という上層部の無責任な方針は、現地に人々の暮らしがあれば容易に略奪となったし、人の住まない南方ジャングルではたちまち飢えた（藤原彰『餓死した英霊たち』ほか）。

陸軍に船舶司令官がいた

これらはすでに広く知られている事柄である。しかし本書を初めて見た時、その副題に驚いた。陸上での戦闘を旨とする陸軍になんと「船舶」司令官がいたというのである。

近代日本の戦争は初期の士族反乱を除けばすべて「外征」である。陸軍の兵士を戦地に送るためには海を渡らなければならない。

「船舶を使う海上輸送業務は本来、海のエキスパートたる海軍の仕事だ。世界中のほぼすべての国の軍隊で、海上輸送を担うのは海軍である。…（陸軍）参謀本部としては、陸軍の部隊を船で外地へ運ぶ輸送任務は海軍に行ってほしいと希望した。ところが海軍は、陸軍部隊を運ぶ海洋輸送の仕事は海軍の仕事ではないと拒んだのである。…陸軍の兵隊を船で運ぶ作業は陸軍が自力で行うべきであり、もし上陸するまでに海上で戦闘が発生するようなら、海軍の主任務ではないけれど護衛するのはやぶさかではないと主張した」。

引用したのは明治 20 年代、日清戦争以前の状態についての記述だが、海軍のエース山本権兵衛（第 16・22 代首相）は、陸軍と海軍の協同の必要は「最小限に制限」する方針で、あくまで陸軍のことは陸軍内で処理すべきとしていたという。本書は広島出身の堀川惠子氏が船舶司令官の遺した記録を遺族から提供されたことをきっかけに「陸軍兵士の海上輸送」というテーマに取り組んだノンフィクションの労作である。広島市南区にある宇品港（現広島港）は明治から昭和まで陸軍兵士を外地に送り出す軍港であった。

船舶司令部とはいっても、自前の船や船員を持たない司令官の苦労は並大抵ではない。実際の海

上輸送には民間の商船を船員ごとチャーターし、輸送船が接岸・揚陸作業が行えない海岸へは上陸のため小さな漁船まで徴発した。積み込み、揚陸にはねじり鉢巻きの沖仲仕が動員される。

本書の内容からは外れるが、太平洋戦争で敵の攻撃により沈没した商船は約 2,500 隻、漁船・機帆船の数は明かでない。戦没海員は 6,000 名を超えるが、約半数が海運会社の社員で残りの半数は水産業からの徴用である。損耗率（戦争に参加した員数と戦死者の比率）は 43%で、陸軍 20%、海軍 16%を上回っている。年齢別には 14～19 歳が 31%超と年少船員が多かった。彼らは軍人でもなければ軍属ですらない。戦後の補償でも軍人恩給の対象からはずれ、極めて不充分なものでしかなかった。

田尻司令官の覚悟と「罷免」

これより先、著者は船舶司令官田尻昌次中将が 1939（昭和 14）年に書いた文書を「発見」した。「民間ノ船腹不足緩和ニ関スル意見具申」と題する文書は、泥沼化する日中戦争の中で、軍による民業圧迫が国内輸送に与える深刻な影響を心配し、陸軍船舶司令官という立場を越えて各省に注意を喚起する意見が述べられている。

翌年 3 月、宇品の陸軍倉庫で起こった火災（不審火）の 3 日後、責任を問われて田尻は陸軍省から「諭旨免職」の処分を受け、軍を去った。

兵站の重要性を熟知し、宇品港の整備に尽くした田尻司令官である。彼をかくも簡単に追放した軍首脳には「輜重輸卒が兵隊ならば……」と同様の目線があったのではないだろうか。

「大佛次郎賞」を受賞した本書の推薦文には「日本軍事史上最も重要で、最も未解明の問題に光を当てた」とある。未解明のまま放置してきた歴史家も「兵站軽視」を免れないかもしれない。

著者の堀川氏は、宇品の存在こそ最初の原爆が広島に投下された理由だと考えている。

帝国陸軍 VS 帝国海軍

本書は「陸軍船舶司令部」の側から見た近代日本軍事史の一側面である。陸軍兵士の海上輸送について海軍の非協力ぶりを訴える叙述が冒頭から出てくるが、両者の対立は実に根が深い。

戦後に公刊された『海軍戦争検討会議記録』は敗戦間もない昭和 20 年 12 月から翌年 1 月にかけて生き残った最高首脳部が 4 回「特別座談会」の名で開いた会議の記録である。「語られたことは…終始全員一致して悲憤慷慨した問題がある。陸軍の暴虐である」とまとめられている。

薩摩の海軍対長州の陸軍という藩閥の対抗意識が根底にあったが、直接には限られた軍事予算の奪い合いで対立は抜き差しならぬものとなる。

特別座談会から 35 年後の昭和 55 年から平成 3 年まで 131 回の「海軍反省会」が開かれている。出席者は太平洋戦争期に主に中佐から大佐であった中堅幹部士官たちである。最終的に 500 ページを超える証言録が 11 巻出たが、最初のあとがきに「敗戦は必ずしも悲観的なことばかりではなかった。①陸軍の横暴が無くなったこと」と総括している。明治以来、日本軍の「陸主海従」という構図は否定すべくもないが、これでは戦争に勝てるわけがないではないかと思ってしまう。

旧軍の病弊は過去のものか

「海軍反省会」の内容は興味深い。日露戦争における日本海海戦の成功体験が忘れられず（司馬遼太郎『坂の上の雲』は相変わらずの人気だが）戦艦大和などの建造を最優先する時代遅れの「大艦巨砲主義」に固執して、科学軽視で日進月歩の武器開発競争に乗り遅れた等々。

海軍兵学校卒業時の成績（ハンモックナンバー）が後々までモノをいう。試験の成績の良かった者が参謀となって、現場を知らぬまま安全地帯から無理な作戦を立案、命令を下し、責任は取らない。この点では陸軍も海軍も差はなかった。

＊

旧日本軍の病弊をみると、さて戦後 78 年を経た今の日本はどうだろうか。

・縦割り行政が生みだす縄張り意識の非効率
・学歴偏重以上にどこの卒業かを問う学校歴偏重
・目先の損得にこだわり基礎研究を軽んずる傾向
・有能な若者の海外流出はますます進み、今後のノーベル賞受賞者は出ないだろうとも……。

旧陸軍（に限らぬ）logistics（物流）軽視の実態を読みながら、ついあれこれ考えてしまった。